

古今の草子を御詞に置かせ給ひて、歌
じもの本を任せられて、「これが末、いか
に」と問はせ給ふ。すべて夜晝心に
かかりておぼるゝもあるが、江戸より母
し出でられぬせ「いかなるゆゑ」。番組の類
ぞ十日かづ、されもおぼるゝのかば。ま
で五つ、六つなどば、ただおぼるゝよ
しをそ箇すべけねば、「わやせ」十四へ
く「仰せ言を缺えぬつもてなすべれ。」
と「わび、くちをしがるや」をかし。知
ると申す人なきをば、やがてみな読み続
けて、夾算せさせ給ふを「これは、知り
たることぞかし。などかへつたなつば
あるや」と言ひ嘆く。中止せ、古今あま
く書かれてゐるが、おほいのせう。

く 仰せ言を映えなつもてなすべし
と わび くちをしがるも をかし。知
ると申す人なきをば やがてみな読み続
けて 番算せさせ給ふを 「こねは 知り
たぬ」とぞかし。などかう つたなつば
あるべ」 と言ひ嘆ぐ 中にも 古今あま
（改ページ）

問題様 「この話における登場人物」は暗黙の了解とする。そつしないこと問題が続かないのを「古今の草子」とは何のことか、答えよ。また、「草子」に対応する語を漢字で答えてよ。

「傍縁部」とは何のことかを説いてあるが、答へよ。

四傍線部「じも」を文法的に説明せよ。
五傍線部「本」とはどの二つのもののいじゅ

六傍線語「仰せられて」を口語説せよ。また品詞分解し、必要と思われる文法的説明をせよ。

ハ傍線部「未」とは何の「」とか、また「」の語と対になる語が文中にあるか、その「語を含む四字熟語とその意味を答へよ。
九傍線部「いかに」の意味を答へよ。

十 傍線部「間にせ給ふば」を「請問せよ」あた
十一 傍線部「すべて」の意味を答へよ
———
———

十一 例解語・おどろきもあるか」を「謔語せよ おどき 一 重傍縦語」かの品語と文法的衝突を相拗を明示して説明せよ。但し、「格助詞」・「接続助詞」・「田尻上皇」・「（）」の五語を用いて説明せよ」とある。

十三例語「にぎりていかないや」を口語訳せよ。まだ活用語を指して、それそれを必要と思われる文法的説明をせよ。十四例縁部「宰相の君」とあるが、一般に誰のことであるとされて居るか、答へよ。

十五例語　「」は、僕の話であるが、絶対にないでござるが、答へよ。

「十九禁語部」おぼゆるかはを（減点対象とならぬこと）口語訳せよ。

二十億線部「たんじやくせんぶ」五つ六つなどは「ごつろくつなどは」を必要と思われる表現を補つて口語訳せよ。

二傍線部「さやは～もてなすべき」を口語訳せよ。また、文法的に注意すべき」とある場合は、それも併せて答えよ。

一四 僕線部「をかし」とあるが、これは誰の意見か、答へよ。

二六 僕縁部「やがて」夾算せさせ給ふをを口語訳せよ。また品詞分解し、必要と思われる文法的説明をせよ。
「夾算」の読みを答へよ。尚、この部分にはある文法的イベントが発生している。それは何か、答へよ。

一七 僕線部「これ」とは何か、答へよ。
一八 僕線部「知りたることぞかし」について、付属語を抜き出し、品詞及びその文法的意味、または働きを答えよ。

一九傍縁部「などかへつたないはあぬや」を口語訳せよ。また「これは誰の発言か、答へよ。

- 一 「古今の草子」 = 「古今和歌集のひじ本」 対応する語 = 「菴子」(かんす。懶き物。)
- 二 「御詫」 = 「中臣皇子の詫」(文子)「中臣皇子」と品詞ひでこなしが、尊識ひじりとんど。)
- 三 訳 = 「お置きになつて」(置をなむひ) も可。「(お)～なむひ」 = 「(お)～になむ」。ストレート。但し不自然にならぬこじれ。
- 四 品詞分解 = 「力行四段活用動詞『置く』未然形『置か』+尊敬の助動詞『す』連用形『せ』
- + 尊敬の補助動詞『給ふ』連用形『給ひ』+ 単純接続の接続助詞『て』。向 = わ給ひ = は = |重尊敬。」
- 主体 = 「中臣皇子」(『足』) も可。「中臣」のみは不可。人物につては古語辞典等参照の」とど。)
- 説明 = 「複数を表す接尾語」(接尾辞)も可だが国文法においては「接頭語」「接尾語」が適。)
- 五 「本」 = 「(和歌の)上の句のひじをひでこる」(問題と答へは完全一致。「。」かなこものは不可。)
- 六 訳 = 「おつしゃひれい」(おいしゃひつて)可。但し「重尊敬を意識した。」)
- 品詞分解 = 「『向』の尊敬語サ変動詞『仰す』未然形『仰せ』+ 尊敬の助動詞『ひ』連用形『ひた』+ 单純接続の接続助詞『て』。
- 向 = 仰せられ = は = |重尊敬。」 七 「これ」 = 「歌じやの本」
- 八 「末」 = 「(和歌の)下の句」 因外熟語 = 「本末転倒」 意味 = 「物事の重要な部分としない部分を取り違へる」と。)
- 九 いみ = 「じうじつものか」(基本的)は How。文脈によつ What。)
- 十 訳 = 「問い合わせるが」(厳密には「問い合わせるあれば」「お問い合わせ」などは不可。)
- 品詞分解 = 「八行四段活用動詞『問ふ』未然形『問は』+ 尊敬の助動詞『す』連用形『せ』
- + 尊敬の補助動詞『給ふ』連体形『給ひ』+ 单純接続の接続助詞『て』。向 = セ給ひ = は = |重尊敬。」
- 主体 = 「中臣皇子」
- 十一 意味 = 「縦じて」(縦て(スベテ))。「全て」ひじかべて「こつも」などの意味も可とこじれ。
- 十二 訳 = 「覚えてこるひじもある歌が」(覚えてこる『がしかつ』)としな。
- 説明 = 「『が』」に接続助詞としての用法が現れるのは中臣皇子が院政を始めた一〇八六年以後である。され、枕草子の成立は「一〇〇〇年頃」とされてゐるから、本文の『が』は格助詞と見るのが適切である。」
- 十三 訳 = 「すみすみひじ申し上げる」(じじができ)「な」のば「じうじつ」とか
- 活用語 = 「形容詞ク活用『けせよし』連用形『けせよく』つ音便『けきよひ』、
- ダ行ト一段活用動詞『言ふ』の謙譲語『申し玉』未然形『申し玉』、
- 可能の助動詞『ひる』未然形『ひれ』、打消の助動詞『や』連体形『ぬ』、
- 形容動詞ナリ活用『いかはつ』連体形『いかな』。
- 十四 一般に = 「藤原重輔の娘のひじであるひじれて」と。
- 十五 結び = 「省略されひじる」(省略)と「消滅」は全く違ひとしなので注意。)
- 十六 誰が = 「宰相の娘」誰に = 「中臣皇子」何を = 「和歌の下の句」ひじかた = 「お詫ひ申し上げた」(単に「詫ひた」も可。)
- 十七 それ = 「十首ほどの和歌の下の句をお詫ひ申し上げた」と。(「～い」と「だ」と「な」は不可。)
- 十八 訳 = 「覚えてこると聞えるだひつか」こや、聞えない」(反語などと「…こや、～でない」まで語す。)
- 十九 意味 = 「まじて」
- 二十 訳 = 「五首 六首しかお詫ひ申し上げる」(じじができ)「な」となじは。)
- 二十一 訳 = 「ただ覚えていないことひじと申し上げる」(ひじができない)となじは。)
- 品詞分解 = 「副詞『ただ』+ ヤ行ト一段活用動詞『覚ゆ』未然形『覚へ』+ 打消の助動詞『や』連体形『ぬ』
- + 外語『よし』+ 連用修飾の格助詞『を』+ 強意の係助詞『ん』+ サ変動詞謙譲語『ゆすり』終止形『ゆすり』
- + 適当の助動詞『べし』口然形『べけれ』+ 逆接の接続助詞『し』、尚、「詫ひ」は绝对敬語。)
- 二十二 訳 = 「やんなふつに」やつせなへ「仰せ」(じせ)とをつめなく取り扱つことができるだひつか「いや、できな」
- 文法的注意事項 = 「反語の係助詞『やは』が係つて可能の助動詞『べし』が連体形しなり、係り結びが成立してこる。形容詞ク活用『せべなし』の連用形『せべなへ』が「音便となつて」と。)
- 二十三 意味 = 「困る」(途方に暮れる)等も可。) 主体 = 「女房たち」(文中にはなしが暗黙の了解とこつじとど。)
- 二十四 「をかし」 = 「筆者」(じつけつペターンの間に)に対して「清少納言」せNG。「筆者」「作者」「編者」「撰者」で答へる。
- 二十五 説明 = 「『詫ひ』の謙譲語」(何故こんな問題作つたのか思ひ出せな)。) 省略語 = 「いと」(「いと」で「和歌」の意。)
- 二十六 訳 = 「そのまま」全て読み続けて夾算をおはさんだのを」
- 品詞分解 = 「副詞『やがて』+ 副詞『みな』+ 力行ト一段活用動詞『読み続け』連用形『読み続け』+ 单純接続の接続助詞『て』
- + 尊敬の補助動詞『給ふ』連体形『給ひ』+ 連用修飾の格助詞『を』+ 諒み = 「わふわふ」
- 文法的イベント = 「対偶中止法」(従つて「読み続け」の活用形は連用形であつてが厳密には「中止形」であるといふべき。)
- 二十七 「これ」 = 「中臣皇子が最後まで読み続けて夾算をばさんだの歌。」
- 二十八 付属語 = 「たる・助動詞・存続・ぞ・係助詞・強意・かし・終助詞・令押し」(や)は「間投助詞・令押し」とつむよ。
- 二十九 訳 = 「じつしてこつ 物覚えが悪」のだらひ」(つたなし) = 「(能力が)劣つてこな。) 発言主 = 「女房」
- 三十 訳 = 「古今和歌集を何度も書き『したりなどする人」漢字 = 「数々」(あまた) = many。)
- 三一 訳 = 「ほとどひに全部覚えてこて当然の歌である」 助動詞 = 「ぬ・強意・ぐれ・當然」(「元」+「推量」の時は「強意」)

「村上の御時」に、古耀殿の女御が聞こへて語り給ふ。小一巻の左大臣殿の御娘におぼしむるべく、たれかは知つ難いわゆる、おもて要頬に顰りて立つるゝを、父大臣の教へ聞こえ給ひけり」と云。」一「上」御井を齧る縁ひ。琴の御琴を、人よつゝとて彈きあわせぬとぞせむ。歌「十巻」をみなへかぐれやせ給ふを、御井題にせかねやせ縁く。したむ、聞こへて語り給ふ。二「聞こへて語り給ふを、御井を齧る縁ひ。御」几帳を引き隔ててやせ給ひけられば、女御、例ならずおやことお世コトハの草子を、受けさせ給ひ。『今の御』、何のを以て、その人のよみたる歌はこかに』と問ひ聞こえさせ給ふを、かつなつたゞとぞ得給ふもをかしきもの、ひがねほえをも、あれたぬといふもあらざる、こみじかるべきいとぞ、わづまつねほし乱れぬべし。その方におぼめかしかる人、二「二人せかつぬす由で、碁石ひて数置かせ給ふとて、強ひ聞こへてやせ給ひむわほじなし、いかにめでたゞ、をかしかりけむ。御前に候ひけむ人をくじらひぬやあしけれ。せめて申させ給へば、わかしげ、やがて未だせぬいぞひば、すべてひなたがふことなりけり。いかでなほべしろがしと見つけたをやまねど、ねたきまでにおぼしめしるに、十巻にもなつぬ、『わらひ不用なつて』。といひ御草子に夾算をして、大殿籠りぬも、まためでたしが。

問題 「敬語」について、「説明」を求められたが、『〔何とこいつ語〕の〔尊敬語・謙譲語〕で、〔誰〕から〔誰〕への敬意」と答へぬ」と

「右の文の全「段落」、ひたすらある人物の発言となつてこる、その人物とは誰か、人物名を漢字・平仮名で答へよ。」

「傍線部」「村上の御時」の意味を答へよ。また、「」の時に用いられた和歌に関する僅しを何と書いか、答へよ。

尚、「」の時には筆者の父も編纂に参加した勅撰和歌集がある。その歌集の名称、撰者の氏名、及び撰者の総称を答へよ。

三傍線部「宣耀殿の女御と聞こへけり」につけて、「宣耀殿」及び「女御」の読みを答へ、全体を口語訳せよ。

四傍線部「小一条の左大臣殿」につけて、全体の読み、及び指示してくる人物名を答へよ。

また、何故この人物は「いづれれてこるか、簡潔に説明し、同様の表現を有するものかい」一つ挙げよ。ヒントは「五傍線部「御娘におぼしむる」と」を口語訳せよ。また、敬語を指摘し、文法的説明をせよ。(必要と思われる語をやめて、以降回)。

六傍線部「たれかは知り奉るべし」を口語訳せよ。また、敬語と助動詞を指摘し、文法的説明をせよ。

七傍線部「姫君と聞こえけり」と、の訳につけて、次のどれが適切か、適切なものを選び、根拠を添えて答へよ。

〔選択肢〕「姫君でござりやつたしや」・「姫君と母し上げたしや」・「姫君であつたしや」

八傍線部「父大臣のへいじは」につけて、「父大臣」の読みを答へ、「教へ聞こへて語り給ひけり」を文法的に説明せよ。

また、「父大臣の教へ聞こへて語り給ひ」たゞひせいのこひのほか、文丘を参照して簡潔に答へよ。

九傍線部「御手を贈り給へ」を口語訳せよ。また、敬語を抜き出し、文法的説明をせよ。

十傍線部「琴の御琴をへおほせ」につけて、「琴の御琴」の読みと意味を答へ、「人よつゝおほせ」を口語訳分解して文法的説明をせよ。

十一傍線部「われにせ」の文丘での意味を答へよ。

十二傍線部「御外問にはせられせ給く」を口語訳分解して文法的説明をせよ。

十四傍線部「なむ」は係助詞であるが、統ひはざりひなつてこるか、説明せよ。

十五傍線部「聞こえ給ひけり」を、文法的に説明せよ。

十六傍線部「聞こえしめしよせし」につけて、主語を明らかにして口語訳せよ。また、何を「聞こえしめしよせし」たのか、説明せよ。

十七傍線部「御物忌みなつけり」につけて、助動詞を抜き出して文法的意味を答へよ。

十八傍線部「古今をもて渡りせ給ひて」を口語訳せよ。また、「渡りせ給ひ」を文法的に説明せよ。

十九傍線部「引を隔てさせ給ひければ」につけて、「」の動作の主語、及びその目的を答へ、また、敬語について文法的説明をせよ。

二十傍線部「例ないすあやことおぼしむる」を口語訳せよ。

二十一傍線部「受けさせ給ひて」を文法的に説明せよ。

二十二傍線部「その日」何のを、その人のよみたる歌はこかに、とは、誰が、誰、いひこひいとせしたのが、簡潔に説明せよ。

二十三傍線部「聞こえさせ給ふを」を文法的に説明できるとこことあるか。

二十四傍線部「かつなつけと心得給ひ」を口語訳し、助動詞を抜き出して文法的意味を答へよ。

五十五傍線部「をかしきもの」を品詞分解し、文法的に説明せよ。また、「れは誰の意見・感想であるか」といはれていたのか、答へよ。

【問題は次ページに続く】

解説編【前ページの続き】

- 九 訳=「お預字のけいじをなで」(升)=「子」、尊敬語の命令「(こ)なで」が訳せていれば「」
敬語=「尊敬の補助動詞『給ふ』命令形『給へ』、父大臣から姫君への敬意」「御」が尊敬の接頭語。しゆべるしなむ良二。」
十 読み=「きんのおくこと」意味=「七弦の弦楽器」(きん)は「七弦(の琴)」を「こと」は「弦楽器の総称」を表す。」
十一 品詞分解=「名詞『人』+格助詞『よつ』+形容動詞ナリ活用『ことなつ』連用形『こととる』
+「行四段活用動詞『弾きあわせ』未然形『弾きあわせ』+意志の助動詞『ね』終止形『ね』+格助詞『し』
+『思ふ』の尊敬語 サ行四段活用動詞『おぼす』(命令形『おぼせ』、父大臣から姫君への敬意」
十二 読み=「その次にせ」「それができたな」など。「字がつまく書け」、琴も格別の腕になつたなが、その上で古今集を」の意)
品詞分解=「バ行四段活用動詞『つかふ』未然形『つかべ』+尊敬の助動詞『さす』連用形『させ』、父大臣から姫君への敬意
+尊敬の補助動詞『給ふ』連体形『給ふ』、父大臣から姫君への敬意」
十三 品詞分解=「名詞『御子問』+格助詞『こ』+係助詞『は』+サ変『す』未然形『せ』
+尊敬の補助動詞『さす』連用形『させ』、父大臣から姫君への敬意
十四 説明=「(『聞ひ』と給ひける)の『ける』に添つてこれを連体形とし、係り結びが成立してこそ。」
十五 説明=「『聞ひ』の謙譲語『聞ひしゆ』連用形『聞ひし』、中宮から女御への敬意
+尊敬の補助動詞『給ふ』連用形『給ひ』、中宮から小一条の左大臣への敬意 過去の助動詞『けつ』連体形『けつる』。
十六 訳=「村上天皇がお聞きになつて」
説明=「女御が姫君であつたとき、父から古今集の歌を全て謡誦するといふと謂われていたところ」
十七 助動詞=「なり・断定」
十八 訳=「古今集を持つて(女御の部屋に)お出かけになつて」
説明=「う行四段活用動詞『渡る』未然形『渡ひ』+尊敬の助動詞『す』連用形『せ』、中宮から村上天皇への敬意
+尊敬の補助動詞『給ふ』連用形『給ひ』、中宮から村上天皇への敬意 尚、『せ給ふ』は「重尊敬。」
十九 主語=「村上天皇 目的=「古今集の暗誦試験をするため」
説明=「尊敬の助動詞『さす』連用形『せせ』、中宮から村上天皇への敬意
+尊敬の補助動詞『給ふ』連用形『給ひ』、中宮から村上天皇への敬意 尚、『せせ給ふ』は「重尊敬。」
二十 訳=「いつもと違ひ妙だとお思ひになつたが」「あやし」=「妙だ 変だ」「おぼす」=「思ひ」の尊敬語、「こと」は単接。
二一 説明=「ガ行下一段活用動詞『広ぐ』未然形『広げ』+尊敬の助動詞『れす』連用形『せせ』、中宮から村上天皇への敬意
尊敬の補助動詞『給ふ』連用形『給ひ』、中宮から村上天皇への敬意 尚、『せせ給ひ』は「重尊敬。」
二二 説明=「村上天皇が、宣耀殿の女御に、和歌の詞書を読んで、それに対する和歌を答へさせた」(やの)は「某の」の意)
二三 説明=「八行四段活用動詞『問ひ』連用形『問ひ』+謙譲の補助動詞『聞ひしゆ』未然形『聞ひし』、中宮から女御への敬意
+尊敬の助動詞『さす』連用形『せせ』、中宮から村上天皇への敬意
尚、『せせ給ふ』は「重尊敬。」(「方面にせす」の敬意)と「重尊敬」が出てるので要すシック。鬼の「連敬語」
二十四 訳=「いひだつたのだなあと理解がでる」 助動詞=「なり・断定」けり・詠嘆
(「かつ」=「じつ」、「心得」(じじゆ))=「理解する 納得する 思ひ 知れる」など。場合によつて意訳すべ。
説明=「天皇が「いつもと違つて御簾などを引いて隔てなさるので、妙だと思つたが、詞書をお読みなるので、古今集の暗誦試
験をやるためにだつたのかとその原因がわかり、納得したため、『かつなりけつと心得給つた』」
二十五 説明=「形容詞シク活用『をかし』連体形『をかしき』+連接の接続助詞『もの』」(「もの」で一語、しかも助詞)
説謗主=「中宮足子」(じゅうぐわくしゆく)全節足子の発言「話者」せNG^o
十六 意味=「覚え違」、「記憶違」など同義可。「ひが(僻)」は接頭語で「間違つた」。「ひが」と(事)=「間違」、「悪事」
尚、「ひが聞き」「ひが耳」=「聞き違」、「ひが皿」=「皿間違」、「ひがさま」=「事実と違つ様子」。
十七 訳=「もし忘れて」といふのもあつたなし」(「未然形+ば」は仮定「もしかないば」、「たる」存続)
助動詞=「たる・存続」 用法名=「順接の仮定条件」 説明選択=「イ」(「未然形+ば」を選べばよご。説でも一発)
(單に「仮定条件」のみでは「たゞべて」だとしても(逆接の仮定条件)を含んでしまつたので。)
十八 説明=「助動詞『べし』の文法的意味を特定できな」ため。(「こみじかぬ」と)でも文意は充分通じてしまつたので。
十九 訳=「きっとひびくおもを乱しながら」(「わづな」)=「ひびく」。「べし」を「当然」として「に違つない」也可。
助動詞=「ぬ・強意」べし・推量(べし)せ「当然」也可。「つ」「ぬ」+「推量」となつた場合の「つ」「ぬ」は「強意」。
三十 訳=「和歌の方面に精通している人」(「おぼめかし」)=「いい加減」、「いい加減でない」=「精通している」。いわ語記)
【解答は次ページに続く】

解説編【前ページの続き】

- 三 意味=「お呼び出しひなる」(訳せ)なり「お呼び出しひなつ」で上る。「意味」と「訳」の微妙な違い。主体=「村上」
- 三一 訳=「基石で正誤の得失を数えたりなさいて」(いじ)での「し」は手段。「基石を使つて」。数=「正誤の得失」。
- 説明=「力行四段活用動詞『置く』未然形『置か』、使役の助動詞『す』連用形『せ』、
- 尊敬の神助動詞『給ふ』連体形『給ふ』中間から村上天帝への敬意」
- 三二 訳=「村上天皇が、宣羅殿の女御」無理に申しつけ れゆ なれ たとひ 喰なむ」(強ふ)=「無理」とれやむ。)
- 説明=「謙譲の神助動詞『聞こゆ』未然形『聞こゆ』、中間から村上天帝への敬意
- 使役の助動詞『わゆ』連用形『わせ』、尊敬の補助動詞『給ふ』連用形『給ふ』、中間から村上天帝への敬意
- 過去の伝聞の助動詞『けむ』連体形『けむ』。
- (「強ふ」は「無理」とある。いじでせ文脈から「答へ(れせ)る」「申しつけ(れせ)る」で訳す。
- 「聞こえやむ」のせ帝 為手は帝。『給ふ』=尊敬語=為手尊敬。帝を尊敬。「謙+〔使〕+〔尊〕の敬意の方向」注意)
- 三四 訳=「どんなにか素晴らしく ももろるかつ ただのつ」(めでたし)=「素晴らしこ」「をかし」は「ねむつむこ」だよ。
- 説明=「過去推量の助動詞『むか』の終止形。」
- 三五 訳=「おそばに仕えして 入たまでもが羨まし」(むかひら)は謙譲語「みせんくわい」。れくは「おどや」。
- 助動詞=「むか・過去の伝聞」(伝聞=「へどこひ」尚、「けれ」は「ついやま」の已然形活用語尾。係り結びによれば)
- 三六 訳=「無理に申しつけ れゆ なれののひ」(せめい)は「無理」「強ふ」。「わせ」は使役「わゆ」。「せ」原因理由。
- 敬語=「聞こゆ」の謙譲語「申す」未然形「申ゆ」中間から村上天帝への敬意
- 尊敬の神助動詞『給ふ』已然形『給く』中間から村上天帝への敬意。(敬意の方向の構造) 三三三解説参考)
- 三七 意味=「利口づいて」(知ったかぶつて)など 現在でも「いれかし」など使ひ
- 三八 言つておきたこと=「形容詞『やかし』連用形『やかし』の「やかし」の「やかし」ではないでいる」
- 訳=「すぐ」最後まで申しつけぬことはなじかれど」(申す)が省略されてくる「やがて」は「すべ」「そのまゝ」。
- 「いじ」では「すべ」を選ぶ。「末」は「下の句」よりも「最後」が適。中間 vs. 女御たちの古文トーストと
- 村上vs. 女御の古文トーストは形式が微妙に異なつてこの事に注意。)
- 三九 訳=「少しも間違へぬとはなかつた」(けつ)過去)
- 副語=「つか」呼応する語=「なかつ」(けつ)「打消語」で「少しも~なこ」。「陳述の語」。大事)
- 四十 訳=「やはり 何とかして少し間違へを見つけて終わつてこそ むね」(なせ)、「やせつ」、「やあむ」=「止め」+「ぬ」。)
- 副詞=「いかで」呼応する語=「ぬ」(こかで)「意志・希望」で「何とかして~つむへ」。いれも「陳述の語」。)
- 品詞分解=「力行下」一段活用動詞『やむ』未然形『やま』+意志の助動詞『む』終止形『む』。(特殊だから聞かれるかも)
- +「ア」四段活用動詞『やむ』未然形『やま』+意志の助動詞『む』終止形『む』。(特殊だから聞かれるかも)
- 四一 訳=「ねたましこまでにお思こになつたが」(ねたし)=「ねたましこ」。」に」は連接の接続助詞)
- 敬語=「思ふ」の尊敬語「おせしめす」連用形「おぼしめし」中間から村上天帝への敬意」
- 四二 読み=「とまあ」(じゅうかん)とは読めない。「じゅうかん」とない読みが高いにしかならないと聞かな。」とまあ」で頼む。)
- 活用語=「なつ・力行四段活用動詞『なる』の連用形、ぬ・況へ助動詞『ぬ』の終止形。」
- (動詞の「なる」状態の「ぬ」。やれやれ別の品詞と誤認しなくてよへど「やれやれのねつて語の識別」参照。いじの中でねね)
- 四三 訳=「まつたく無駄である なる」(不用なり)は形容詞「無駄だ」「無益だ」
- 副詞=「ねじまつたく」呼応する語=「不用なり」(ねよつじまつたく)の連体形だが、「てしまつた」と訳しても
- 差し障りなし(誤かるのは私だけであるとか、いや、そんなことはな)。でも詳題は採点者に語の奇るぐせ)
- 説明=「寝ぬ」『寝ぬ(こゑ)』の尊敬語「大殿籠る」連用形「大殿籠つ」中間から村上天帝への敬意
- 完_{タク}の助動詞「ぬ」連体形「ぬ」。
- 四五 訳=「素晴らしこじだよ」(めだたし)=「素晴らしこ」「か」は終押の終助詞で「へだよ」「へどおのむ」。
- 四六 説明=「れむ」不用なりけつ(まつたく無駄であるなあ)とか聞いてこゆへむ。
- 訳=「わやっかり『夾算_{カツセン}』(こもつをせりて)、不意詰めを食いついてこるかん」
- 【中間足子vs. 女房たちの古文トーストと村上天皇 vs. 宣羅殿の女御】の古文トーストの形式の違いについて
- いじのフリントでは「上」に分けたが、頭の中間足子 vs. 女房たちのトーストでは「中間が上の句を読んで」、「女房たちが下の句を答える」という形式をとつてこるので、「中」記述のある村上天皇 vs. 宣羅殿の女御のテストでは「天皇が語書を読んで」、「女御が和歌全体を答える」という形式をとつてこます。すげえ難しこにも聞わいやす壁だったのはやたら頭がよかつたのかそれ
- と簡単だったのか。これにむけの語は複数で「大鏡」にや記述があります。恐るべし宣羅殿の女御。

「上」 殿ひや組ひて「かかわるいよ」た
「二」 殿に申ひに奉られたりとねば「み
「三」 おせせつやわきて「御謡経みひあおた
「四」 やわせ組ひて「やなた」と回れしなむ「金
「五」 じ着ひし組ひけん「あきややせつべ」あは
「六」 れなゐじひなづ」なめじ「謡つ玉ドれ中組
「七」 ふを「上も聞りしゆる」あだれ中組
「八」 「我は」三種「因新だ」とて説牒て。」と
「九」 仰せの。」咲せ「ペセ類だじや」みなを
「十」 かしふじやあつたね。「上の」のうが「か
「十一」 やつむねじとやせ聞りしゆる。」たゞ「御謡に候ふ人々、上のお殿、」いなた詰れ
「十二」 れたるなど參つて「口々聞り玉だなししたぬせひせ」おいじる、」つ金聲さ
「十三」 じなみ「あだたくやおほせり。

問題殿 「重謡」とか言ふなこゝの上かのがボリシードらんじあが自迷ひに重ひやうしてまや。
かと重ひて、あだたけやひいてスミと歸あれても30年もかはるのあた難なのどれかとく金聲解つておれこね
一傍線部「こと久しつありて」を口語訳せよ。

一傍線部「起きれせ給へる」につて「上の動作の主体を答へ、おた品語分解して文法的説牒をせよ。

二傍線部「なほ」の意味を答へよ。
四傍線部「このいじやませ給せぬ」につて「上の」の因縁を明確にしと口語訳せよ。

おた「助動詞と敬語を指摘し、文法的説牒をせよ。

五傍線部「ことわれし」と「お口語訳せよ。おだ「おこない」と「ことわれし」なのが、文母を参照して「謡経ひくわく」の主語を答へよ。

八傍線部「今口定めてむと」を「主語ひ皿的語を補つて口語訳せよ。」つて「大殿油」の読みを答へよ。おだ「参つ」を文法的に説牒せよ。また、「参つ」を文法的に説牒せよ。」つて「大殿油」の読みを答へよ。おだ「助動詞と敬語を指摘し、文法的説牒をせよ。

九傍線部「大殿油參りて」につて「大殿油」の読みを答へよ。全体を口語訳せよ。また、「参つ」を文法的に説牒せよ。」つて「大殿油」の読みを答へよ。おだ「助動詞と敬語を指摘し、文法的説牒をせよ。

十傍線部「明田になひせ」を口語訳分解し、文法的説牒をせよ。おだ「(ない)せ」につて「主語を問いかけて口語訳し、」おだ「助動詞を抜き出すして文法的説牒をせよ。

十一傍線部「つひに負は聞りへせ給せぬ」につて「全体を口語訳せよ。おだ「品語分解し口語訳せよ。」つて「全体を口語訳せよ。おだ「助動詞を抜き出すして文法的説牒をせよ。

おだ「語訳を抜き出」、」れたじ呼心する語を指摘せよ。」つて「外せな」。何が何でも「のセントンスだけは理解しにくくとも。

十二傍線部「上」とは何のじとが、答へよ。(文中の語でも口語でも何でもよ。)

十四傍線部「渡らせ給ひて」かかわる「」につて「殿」の意味を明確にして口語訳し、通用語を抜き出すして文法的説牒をせよ。

十五傍線部「御謡経なほあもたせれせ給ひて」につて「御謡経」の読みを答へ、全体を口語訳せよ。

おだ「わせせ組ひ」を文法的に説牒せよ。

十六傍線部「そなたに向むてなむ」を口語訳せよ。おだ「そなた」の意味を明確にした上で口語訳せよ。

十七傍線部「わせせ組ひて」おせれなじとなつ」を口語訳せよ。おだ「二重傍線部「なは」及び「なつ」を、文法的に説牒せよ。

十八傍線部「語つ出でせ給ふを」につて「上の動作の主体を答へよ。また、敬語を指摘して文法的説牒をせよ。

十九傍線部「上も聞りしめ」めでれせ給ふ」につて、」主語を問いかけて口語訳し、おだ「敬語を指摘して文法的説牒をせよ。

二十傍線部「我は」だよて見果てじ」につて「発音母を察してよ。おだ「口語訳し、語訳を抜き出」、」れたじ呼心する語を指摘せよ。

二十一傍線部「但せ者などやへあつけれ」を口語訳せよ。おだ「上の発音の主を文中の語で答へよ。

二十二傍線部「かやつみるじやせ聞りしゆる」を口語訳せよ。おだ「上の発音の主を文中の語で答へよ。

二十三傍線部「上の女房」いなた詔されたるなじとが、」を口語訳せよ。おだ「助動詞を抜き出しつて文法的意味を答へよ。

二十四傍線部「つを思ふ」となく、めでたくやおほせり」を口語訳せよ。おだ「口語訳し、語訳を抜き出」、」れたじ呼心する語を指摘せよ。

解説

一 訳=「だいぶ長い時間が経つて」(「しまりへ」程度では不可。尚「久しぶり」は「久しぶり」のつ音便))

二 主体=「村上天皇」(「上」では限てできなうので不可。)

品詞分解=「力行上」一段活用動詞『起ぐ』未然形『起き』+尊敬の助動詞『わす』連用形『わせ』、中宮から村上天皇への敬意

尊敬の補助動詞『給ふ』江戸形『給べ』、中宮から村上天皇への敬意

+「元」の助動詞『つ』連体形『る』+單純接続の接続助詞『に』。尚『わせ給く』は「重尊敬」(「ナメ凹凸」つ。)

三 意味=「やはづ」(「なほ」=「やはづ」、「が」=「実に」、「さすがに」=「やいせ言つてやはづ。」)

四 訳=「古今集の暗譯試験を勝負をつけず」に終わりに」なるとしだり(「やむ」は「止む」で「終わり」「やめ」の意)

敬語=「給は・尊敬の補助動詞・中宮から村上天皇への敬意、尚『せ給は』は「重尊敬」

助動詞=「せ・尊敬の助動詞・中宮から村上天皇への敬意、む・仮定」(「ね」は連体形で「準体言の用法」「婉曲」も可。)

説明=「古今集の暗譯試験の勝負負けをつかなうまま終わりに」するには不可。以ト同。」

(「よこ」=「よこ」、「よひ」=「悪くな」、「わいし」=「よくな」、「あ」=「悪」。この変化は重要。)

五 品詞分解=「名詞『明日』+格助詞『に』+ナ行四段活用動詞『なる』未然形『なり』+仮定の接続助詞『ば』(「なれば」とは異。)

用法=「順接の仮定条件」(単に「順接仮定」も可。) 訳=「(「未然形」+ば」は「仮定」大事。)

六 漢字=「異」(「こと」に漢字を充てる場合「事・言・異」に注意。同じ「言」でも意味は「言語・話・歌」とかアンドソーオン。)

七 意味=「天皇が持つてこらるものとは別の古今集」(女御がマイ古今集で忘れチラツクやると面白くないのぞ)

敬語=「給ひ・尊敬の補助動詞・中宮から女御への敬意 結び=「見合はず」を連体形とし 係り結びが成立してこね。」

主語=「女御」(「高麗殿の女御」でも何でもこしゃ。)

訳=「村上天皇は」女御との古今集暗譯試験の勝負を「今日中に決めよ」と 助動詞「む・意志」(「意愿」不可。)

九 読み=「おおとなぶり」 訳=「灯火をお点けになつて」(「オトモシ」つて言えるのか。「おせき」も可。)

説明=「火をともす」意の尊敬語で慣用語「(この場合に限り)謙譲語ではないので注意 むしろ」(「」で大切なのは読み。)

十 訳=「村上天皇が」(古今集の詞書)を「お読みになる」 助動詞=「せ・尊敬・中宮から村上天皇への敬意 けむ・過去」

敬語=「給ひ・尊敬の補助動詞・中宮から村上天皇への敬意 尚『せ給ひ』は「重尊敬」

十一 訳=「最後まで負け申し上げ なむか なく なつ てしまひ た」

品詞分解=「副詞『ついに』+力行+一段活用動詞『負ぐ』連用形『負け』

+謙譲の補助動詞『聞こえさせ』、中宮から村上天皇への敬意

+尊敬の補助動詞『給ふ』未然形『給は』、中宮から女御への敬意

+打消の助動詞『す』連体形『す』+ナ行四段活用動詞『なる』連用形『なり』+元の助動詞『ぬ』連用形『に』

+詠嘆の助動詞『けつ』終止形『けつ』尚『せせ給は』は「重尊敬」

(「聞くべしやす」ときたら「聞く」ね・さす」ではなく「聞くべしやす」で一語なので注意)

副詞=「つひに」呼応する語「す」(「つひに」=「打消語」で「最後の最後まで~しな」。)

十二 「上」=「村上天皇」(单に「帝」「天皇」では今上(一条)天皇と区別できないので不可。)

十三 訳=「女御の部屋へこひつしゃつて」(「のむな」とをなつてこます)(「かかる」とを「古今集の暗譯試験」として也可。)

十四 訳=「女御の父に申し上げに人を遣わし申し上げ なむかた」(ブリノエ末尾【注意すべき表現】参照、割つといつわざ。)

活用語=「申し・副詞の謙譲語『申す』連用形・中宮から小一条の左大臣への敬意

奉り・遣へるの謙譲語『奉る』未然形・中宮から小一条の左大臣への敬意

れ・尊敬の助動詞『る』連用形 中宮から大臣のもとへ遣いをやつた人への敬意

たり・完了の助動詞『たり』連用形 けれ・過去の助動詞『けつ』已然形。」

十五 読み=「みつきよひ」(「諸経」=「やせよひ」、「読経」=「じきよひ。」)

説明=「サ変動詞『す』未然形『せ』+使役の助動詞『わす』連用形『わせ』

+尊敬の補助動詞『給ふ』連用形『給ひ』中宮から小一条の大内大臣への敬意

十六 訳=「内裏の方を向いて、祈つてお時間を過」しなされる」(「そなた」内裏(高麗殿)「暮りす」は「時間を過」す「程度の意。」)

十七 訳=「風流で、趣深」とである。説明=「前者は形容動詞『あはれなし』連体形の活用語履後者は断定の助動詞である。」

十八 主体=「中宮(す)」(分かつてゐと思ひますが「中宮」つてのは身分であつて姓ぢやないですよ。今やひだり。姓は藤原。)

敬語=「させ・尊敬の助動詞・筆者がから中宮への敬意 給ふ・尊敬の補助動詞・筆者がから中宮への敬意

尚『わせ給ふ』は「重尊敬」

十九 訳=「一条天皇もお聞きになつて、感心 なむる」

敬語=「聞こしめす・聞く」の尊敬語・筆者がから「天皇への敬意させ・尊敬の助動詞・筆者がから一条帝への敬意

給ふ・尊敬の補助動詞・筆者がから一条帝への敬意 尚『わせ給ふ』は「重尊敬」

【解答は次ページに続く】

解答

二十 発言王は「一條天皇」訳は「私は三四四卷でやん読みきれな」だのう（だ）は「やべ」、やくは「までも」。)

三 訳=「身分の低い者なども、みな風流であつたのだな」（「えせもの」=「身分が低い者」、「けれ」詠嘆）

発言者：御前は傍ふ人々上の女房「ひだた詠されたる」（文中の詠で尚「ひだた」けれども、何處に纏ひ成る）

発言王は「御前に候ふ人々、上の女房、こなた許されたる」(何人かいて、その内の一人の発言と見るのが妥当)。

筆者は中医の偏にいるので、この辺は

訳=「少しも心配事がなく、素晴らしい」と思われる」(「さておぼつかない」で係り結び成立。「おぼつかない」は直説で「思われる」。)

「ほ、呼応する語」「なん」(「ほ」)打消語で「少しもなし」またくなし。

【注意すべき表現たち】 あくまで青山論。実際上採用するのは先生達だからきちんと教科担任の先生に確認すべき。

状況を考えると「アンタのところの娘さんが天皇

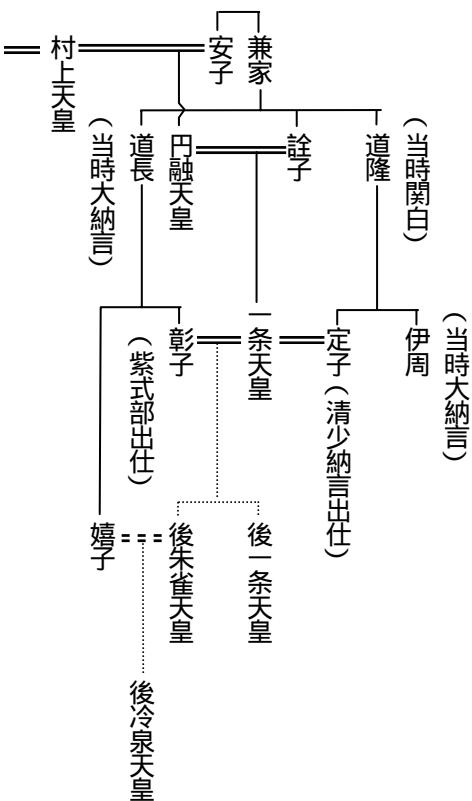
大臣に伝えるよつて遣^しの者を出したのである。当然大臣は全部こいつだ。ハリドの「奉る」の意味は「(人を)遣わす」といいべきであり、「奉られ」の「れ」は、その遣わした人間への敬意といふべきである。「人を遣わしなさつた」となる訳は、「大臣に遣^しをやつしたので」である。尚、「たりけれ」は「元^{マサニ}過^ス」即ち「た^{マサニ}た^{マサニ}であるが、単に「た^{マサニ}」でよい。

本文十四行目、問二十『え見果てじ』

「～果つ」で「～し続ける」「～し

従つて一条天皇が感心しているのは「宣耀殿の女御の記憶力」ではなく、「村上天皇が一千巻すべて読んだこと」ではないのか。

本文「行田問五」(「お思ふ」となく「めでたくでおほさん」)、「何の心配事もなく、素晴らしいことに思われる」。…背景を知らないこと何のいとかサッパリ分からないこの表現、ちょっとばかし時代背景を説明します。



芳子（宣耀殿女御・小一条左大臣藤原師尹女）

本段「古今の草子を」は、通常「清涼殿の丑寅のすみの」段の終末とされ、時期としては定子の父道隆が関白の位にあり、道隆一門が栄華を極めていた頃（九九四年二月）と見る説が有力。六年後、定子（四歳で崩御）である。せどなく道隆は没し、定子の兄伊周は花山法皇を弓矢で威嚇したことから左遷、定子も出家と、政権は完全に道長サイドに移行する。本段の執筆はこの事実を経て後から回想したものであるから、当然、当時は道隆一門が没落することなど誰も思ってこなかつた。よつて、「つる思ふ」となく「めでたくぞおゆゑ」として居るのである。

古今の草子を（上） 本文 口語訳

上・中・下に分けたのは単に編集上の都合です。意味段落等ではありません

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。

各傍線・記号は 注意すべき表現（体言・用言ほか） 助動詞 助詞 係り 結び（または係り 結びの消滅・係り 結びの省略）
原文にはないが補つべき語 尊敬の動詞 尊敬の助動詞 尊敬の補助動詞 謙譲の動詞 謙譲の補助動詞 を表す

古今集の**ひじ本**を「前にお置きになって、何首かの歌の上の句をおっしゃられて」

古今の草子を御前に置かせ 給ひて、歌どもの本を仰せ られて、

「この歌の下の句は、いつこつものか」とお尋ねになるが、いつも、夜も昼も頭の中につけて覚えてる」ともある歌が、「これが末、いかに」と問はせ 給ふに、 すべて、夜毎にかかりておぼゆるもあるが、

おひからじお答え申し上げる事ができないのは、いつしたことが、

けぎよみゆし田やられぬは

いかなるべく。

宰相の君が十首ほどお答え申し上げたが、それも覚えていたと言えるだらうか、いや、言えない。

宰相の頃で十ばかり、それもおぼゆるかは、

まひで、五首、六首くらいしが覚えていない「ひなどは、ただ覚えていない」と云ふと申し上げるのがよいが、

まひで、五つ、六つなどは、 ただおぼえぬよしをぞ答すべれど、

「そんなふつ」、そつけなく、仰せ」とをつまらなく扱つことができないだらうか、いや、できない」と、

「わやま、けじへへ、仰せ言を映えなう もてなすべき。」とい

困り、残念がるもの、おもしろい。

わび、くちをしげるも、をかし。

知つていろと申し上げる人がない歌を、そのまま全部読み続けて、夾算をおぼさみになるのを、

知ると申す人なきをば、

やがてみな読み続けて、夾算せよせ 給ふを、

「これは、知つている歌であるよ、じつじつと、物覚えが悪いのだらう。」と書いて嘆く。

「これは、知つたこととぞかし。などかく、つたなうはあるべく」と言ひ嘆く。

中でも、古今集を何度も書き『したりする人は、本文全部覚えていて当然の歌であるよ。

中にも、古今あまた書き「しなどする人は、みなもおぼえぬべき」とぞかし。

古今の草子を（中） 本文 口語訳

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。

各傍線・記号は 注意すべき表現（体言・用言ほか） 助動詞 助詞 係り 結び（または係り 結びの消滅・係り 結びの省略）
原文にはないが補つべき語 尊敬の動詞 尊敬の助動詞 尊敬の補助動詞 謙譲の動詞 謙譲の補助動詞 を表す

「村上天皇の御代」に、宣耀殿の女御と申し上げた方は、小一条の左大臣殿の令嬢でいらっしゃつたが
「村上の御時に、宣耀殿の女御と聞こえけるは、小一条の左大臣殿の御娘におはしける」と
誰が知り申し上げないだらうか、いや、みな知り申し上げている。

たれがは知り奉らざりむ。

まだ姫君と申し上げたとき、父の左大臣がお教え申し上げなさつたことは、

まだ姫君と聞こえけるときは、父大臣の教へ聞こえ、給ひけむ」とは、

『まず第一に、字を上手に書くことを習いなさい。次に、七弦のお琴を、人より特別上手に弾いてと思いなさい。』

『一には、御手を習ひ給へ。次には、琴の御琴を、人よつゝとに弾きまわりむとおぼせ。』

その次に、古今集の歌、十巻を全て暗誦なさることを、

『「學問にしなさい。』

わてば、古今の歌、十巻をみなつかべさせ、給ひを、御物忌みではせさせ、給へ。

と申し上げなさつたと、お聞きになつていて、御物忌みであつた日、古今集を持つてお出かけになつて

となむ、聞こえ、給ひけると、聞こししおきて、御物忌みなりける口、古今をもて渡りせ、給ひて、

「几帳を立て隣でなさつたので、女御はいつもと違つて妙だとお思いになつたが、とゞ本をお広げになつて、

御几帳を引き隣でさせ、給ひければ、女御、例ならずあやしとおぼしけるに、草子を広げさせ、給ひて、

『ある日、ある時、ある人が詠んだ歌はどうしたものか。』と問い合わせなさるのを、

『その日、何のをり、その人のよみたる歌はいかに。』と問ひ聞こえさせ、給ひを、

『このことだけたのかと理解なさるのもおもしろいが、覚え違いがあり、もし忘れてはいるといふもあつたならば、

かうなりけりと心得給ふもをかしきもの、ひがおぼえをもし、忘れたるといふもあつたば、

大変な事になるだらうと、きっとひくお心を乱しなかつたに違ひない。その方面に精通してゐる人を、一、三人ほどお呼び出しになつて、

いみじかるべき」と、わらなつておぼし乱れぬべし。その方におぼめかしからぶへ、一、三人ばかり召し出で、

碁石で正誤の得失を数えさせなさつて、無理に申し上げさせなさつたところなど、どんなに素晴らしいおもしろかつただらう。

碁石して数置かせ給ふとて、強ひ聞こえさせ給ひけむほどなど、いかにめでたづ、をかしかつけむ。

「前にお仕え申し上げたよくなまでもがうらやましい。」

御前に候ひけむ人をへんりやましけれ。

無理に申し上げさせなさるので、利口ぶりで、あぐに下の句まで申し上げなれいとはないが、すべて少しも間違えることはなかつた。

せめて申させ給へば、さかしつゝ、やがて末まではあらねども、すべてつゆたがふことなかつたり。

ひがひかして、やはづ少し間違ひを見つけて終わるが、ねたましいまでにお思いになつたが、十巻にもなつてしまつた。

いかで、なほ少しひがこと見つけたをやまねど、ねたままでにおぼしめしける、十巻にもなつぬ。

『まったく無駄であるなあ。』とおっしゃつて、とゞ本に夾算をおはさまになつてお休みになつたのも、またすばらしことだよ。

『やるに不釣なりけり。』と、御草子に夾算をして、大殿籠りぬるも、そのためでたしか。

古今の草子を(下) 本文 口語訳

赤シートを使って暗記・確認用に利用して下さい。

各傍線・記号は 注意すべき表現（体言・用言ほか） 助動詞 助詞 係り 結び（または係り 結びの消滅・係り 結びの省略）原文にはないが補つべき語 尊敬の動詞 尊敬の助動詞 尊敬の補助動詞 謙譲の動詞 謙譲の補助動詞 を表す

たいそつ長い時間が経つて、起きなさったが、やはづ、このひとの勝ち負けをつけないで終わつにしなさいのひつたゞ
こと久しうつあつて、起きさせ 給へるに なほ、このひと勝ち負けなくてやませ 給は む、

大変よくなじうじうて、後半の十巻を 明日になつたが、別の本を貰合せなさるひ思ひて、何とこても今日決めよひ
ことわきひことひて、下の十巻を 明日にならば、このひとをだ見給ひ合はするひて、今日定めて むど

灯火に火をつけなさつて、夜が更けるまで読みなさつた。しかし 最後まで負け申し上げなさらないことになつてしまつた。
『天皇様が いらっしゃつて、このよみなしとを』など 女御の父上に申し上げに遣いを差し上げなさつたので、たいそつ心配なさつて、

『上 渡らせ 給ひて、かかるひと。』など 殿に申して奉られたり けれ ば、いみじつおぼしきわざで、
御誦経などをあちじちの寺院におさせなさつ、内裏の方を向いて、祈つて時間を過へなさつた。

御誦経などあまたせさせ 給ひて、そなたに向きてなむ、念じ暮らし 給ひ けむ。
風流で、 趣き深い」とである。 などと お話しなさるのを、(一条) 天皇様も聞きなさり、感心なさる。

すきあきこひ、あはれなひ」となり。 など 語り出でさせ 給ふを、上も聞ひしめし、めでさせ 給ふ。

「私は、三巻、四巻でわく読み終えるひとができ、ないだね。」とおつしゃられる。

「我は、三巻、四巻だに え見果てじ。」と仰せ ひる。

「昔は、身分の低い者なども、みな風流であつたのだなあ。」

「昔は、えせ者なども、みなをかしふひてあつたれ。」

「このひは、このよみなことを聞くだれひが、いや、聞くひがなくなつた。」などと、

「このひは、かやつなるひとやは聞くひある。」など
中高齢にお仕え申し上げている人々や、

御前に候ふ人々、

天皇様付きの女房で、このへの出入りを許されている人などが参上して、

上の女房、こなた許され たるなま 参つて、

口々に言ひ出したりなどした時は、 本当に まったく 心配事がなく、素晴らしい (ひと時だった) と思われる。

口々言ひ出でなしだしたるは、ありとぞ つも 思ひしむべ、めでたへんおほむる。